

# 令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【西原中学校】

⑥ 次年度への課題と授業改善策	
知識・技能	各教科の多くの領域で前年度比の向上がみられたが、基礎の定着の面では依然として課題が残る。朝学習のスタディサプリ、数学やG・Sの基礎テスト(単元テスト・スプリングコンテスト)の継続実施のほか、家庭学習でのスタディサプリ実施率の向上に努めていく。特に朝学習で実施していない国語でも、文法事項の理解向上のために授業内の練習や家庭学習での問題の利用を促していく。また、国語やG・Sを中心に辞書(オンライン辞書サイトを含む)の積極的な利用を指導し、生徒の語彙力の向上や用語等の概念の理解につなげていきたい。
思考・判断・表現	ここまで積み上げてきたYWTによる振り返りの記入を継続するとともに、個別最適な学習と協働的な学びの一体的な充実を図ることで、振り返って記述することはもとより、その場で考えをまとめながら話すことやクラウド上での意見交換などを促進し、主体的・対話的に学びにつなげていくことが課題となる。生活調査の質問項目4「自分でやると決めたことはやり遂げるようになっていますか」に対して肯定的な回答をした生徒ほど、各教科の正答率が高いことや、今年度の教科書の継続的な取組の結果からも、各教科で、粘り強く物事に取り組むことができる生徒の育成に向けて指導を積み重ねていく必要があると考えられる。

① 今年度の課題と授業改善策		
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	【学習上の課題】全国および市の学力学習状況調査では、多くの教科で市平均をやや下回っており、特に概念的な理解や定額についての理解度が低い。 【指導上の課題】教員による説明や教科書の言葉をなぞるなど、表面的な指導で終わってしまうケースが多い。	⇒ 授業での説明のほかにも、全校でスタディサプリに取り組む時間の設定や、宿題配信など、基礎定着のための機会を確保する。【スタディサプリの時間：年間15回】 基礎の確実な定着のため、数学とG・Sの授業内で単元テストやスプリングコンテストなどの基礎テストを行う。【単元テスト：4～5回、スプリングコンテスト：10回】
思考・判断・表現	【学習上の課題】知識・技能が不十分であるため、思考が深まらず、できる生徒中心で議論が進んでしまうことがある。また、記述での無回答率が高かった。 【指導上の課題】授業ことに行う「やったこと」W(わかったこと)T(次にやること)による授業の振り返りを先送りしたりや事後にまとめて書かされたりするなど、時間確保が不十分なケースが多かった。	⇒ ICTを利用することで、一人ひとりが意見を出すハードルを下げる。グロウスログやYWTでの家庭学習および授業振り返りを継続し、書くことを習慣づけさせる。基礎部分をスタディサプリなどのデジタルドリルでも行うことで時間の使い方を工夫し、授業振り返りの時間を確保する。【R6市学力・学習状況調査の「思考・判断・表現」領域の平均正答率の向上】

⑤ 評価(※) 授業改善策の達成状況	
知識・技能	A 朝学習としてのスタディサプリを数学、社会、理科、G・Sで計15回実施したほか、各教科の長期休業の課題や自習課題等に活用し、基礎の定着のための反復練習を行った。G・Sのスプリングコンテストは10～11回実施して、小学校で学んだ基本語彙や動詞の過去形を中心に出現し、生徒は意欲的に取り組むことができた。数学の単元テストでは、苦手な生徒も合格を目指して繰り返し取り組む姿が見られた。覚えた単語を使って英文を作るなど、定着した基礎事項を活用した表現活動につなげていきたい。
思考・判断・表現	A 学校共通で行うYWT振り返りの記入では、生徒の思考過程が深まっていることを読み取れる記述が増えてきた。教科によっては、よく書けている人の例を共有することや、書くべきポイントをあらかじめ提示するなど、工夫をして、考えを文章にまとめることへのハードルを取り除くことに取り組んだ。学習状況調査の「思考・判断・表現」領域の偏差値は、前年度との異集団比較で、1学年は国語の市平均-2.6から市平均+5.3をはじめ、全教科で市平均を上回った。2学年(同集団比較)は数学でR5年度の市平均-2.1から市平均+8.5に、社会で-2.0から+2.3に上昇した。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

② 全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語では、言語文化に関する事項で前年度の全国平均-6.3ptsから、+1.1ptsと大きく向上した。しかし、言葉の特徴や使い方にに関する事項・情報の扱い方に関する事項は、若干全国平均を下回り、前年度とほぼ同様の結果となった。数学では、すべての領域で県・全国の平均を上回り、特にデータの活用に関する設問(問題番号5、(1)、7(3))では、高い正答率でかつ、無回答も低くなった。前年度比では、昨年度の全国平均-0.6ptsから、+8.6ptsとなった。知識・技能領域の設問では、国語・数学ともに、無回答率は県・全国の平均と比べて低く、わからなくても何とか答を見つけようとする姿勢が身についてきたと考えられる。
思考・判断・表現	国語では、読むことの領域で前年度の全国平均-2.1ptsから、+2.7ptsと向上したが、書くことについては、全国平均との差が広がり、課題がみられる。特に、記述式で満たすべき2つの条件のうち、片方の条件のみを満たす形の誤答が多く、無回答率も高いことから、長文記述回答が苦手であることが伺える。数学では、県・全国の平均を3～4pts上回った。記述問題でも、正答率が県・全国の平均と比べて下落することがなかったが、問題番号6(2)と9(1)を比較すると、証明問題等で長文の記述をするときに、無回答率が上がる傾向が読み取れる。記述する力がついてきた生徒がいるのと同時に、苦手意識が払しょくできない生徒も少なくないと考えられる。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④ さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	1学年では、全教科のほぼすべての設問で無回答率が市平均を下回っており、考えて自分なりの答えを出す姿勢が浸透していることが伺える。昨年度の1学年との比較(異集団比較)ですべての教科で向上が見られ、特に国語の漢字や語彙に関する設問に強みが見られる。 2学年では数学の「関数」や「データの活用の領域」の同集団比較で向上が見られた。理科では、「粒子」を柱とする領域の同集団比較で向上がみられた。一方で、国語の文法事項の理解に関しては、依然として課題が大きい。語彙力や代名詞等の照応の理解を向上させることが求められる。
思考・判断・表現	1学年では、国語の「読むこと」「言葉の特徴や使いに関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」の設問で高い正答率だったことから、国語の力が他教科での理解に好影響を及ぼしているものと推測される。2学年では、数学全領域で前年度(同集団比較)より向上がみられ、特に関数とデータの活用において、正答率の向上が顕著であった。これらの設問においては、無回答率も0%であった。授業内で生徒が自分の言葉で説明したりレポートにまとめたりする活動を粘り強く行ってきた成果が現れつつあるものと考えられる。課題としては、国語の「読むこと」の領域の苦手克服と無回答率の改善が挙げられる。知識・技能の定着とともに、自分の言葉で説明する活動を続けることで、改善を図っていく。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	多くの教科でスタディサプリを夏季休業や週末等の宿題に活用し、基礎の反復練習を行うことで、生徒が定期的に学習に取り組む習慣が定着してきた。各教科の基礎テストは授業計画に基づいて確実に、生徒は意欲をもって取り組むことができた。	変更なし
思考・判断・表現	B	全教科で授業振り返りの活動を授業の最後に取り入れる共通理解を図り、時間を確保することで、文章記述への抵抗が少なくなってきた。感じたことや自分の考えをより分かりやすく表現するための語彙力の向上や、対話の中での理解の深化が今後の課題と言える。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)